

柳美里の作品にみる現代の家族関係と住空間

文学 家族 住空間

【序論】今日、現代社会における家族の問題が様々なメディアによって取り上げられている。例えば少年犯罪や援助交際、家庭内暴力などといった出来事は日常的に報じられるが、それらは家族の責任や住環境の影響などに置き換えられることが多い。文学においても、現代社会において特化された家族像を住空間との関わりの中で描く作品が存在する。本研究では、現代の家族の問題を意欲的に捉えながら、住空間を描いている作家、柳美里(1968～)の作品のなかから『フルハウス』『女学生の友』を研究対象とし、現代における家族関係と住空間の相関性を明らかにすることを目的とする。

【研究対象及び研究方法】住空間の記述部分を研究対象とし、文章を一文ずつに分割し、各文ごとに登場人物がいる場所を「場所1」、そこから他の場所に意識を向けている場合は、その場所を「場所2」とし、「場所1」「場所2」を「登場人物」と共に抽出する。また、建築

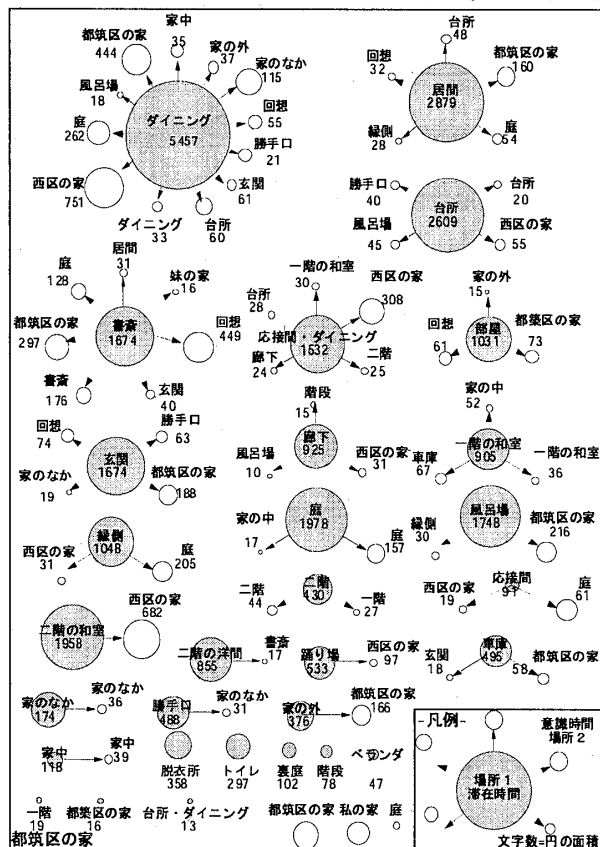


図1-1 『フルハウス』における舞台別意識時間図

正会員 ○久保 文乃\*  
同 渋谷 佳克\*\*  
同 若山 滋\*\*\*

空間に関する用語である「建築用語」と併せて、建物の構成や、その空間を特徴づける様子、雰囲気、登場人物の空間に対する心理描写を「建築表現」と定義し、抽出することで以下の考察を行う。

(1) 抽出した「建築用語」を[建物][部屋][部位][建具・部材][家具][庭][その他]に分類し、住空間の構成要素について考察する。(2) 「場所1」における文字数を「滞在時間」、「場所2」における文字数を「意識時間」と捉え、舞台同士の関係を舞台意識時間図で示し、空間の意識的な連続性について考察する。(3) 抽出した建築表現の中から<光><音><温度>など空間を特徴づける要素を建築表現要素とし舞台ごとに抽出することで、舞台同士の関係性について考察する。(4) 建築表現を主体別に抽出し、主要登場人物の住空間に対する価値観が何に注目して表現されているかを主体別意識相関図に示し、登場人物同士の関係について考察する。

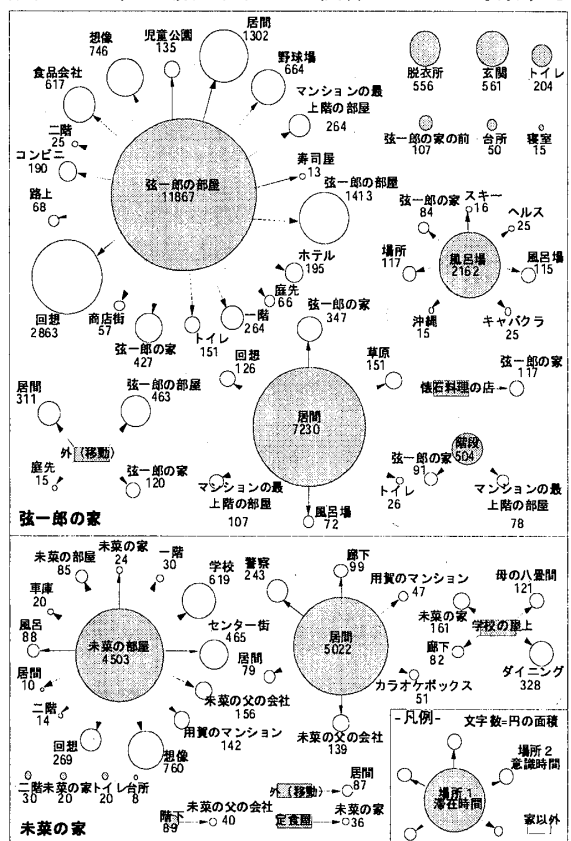


図1-2 『女学生の友』における舞台別意識相関図

The Family Relationship and Life Space at the present time on the Literary works of Miri Yu

KUBO Ayano, SHIBUYA Yoshikatsu, WAKAYAMA Shigeru

【舞台別建築用語の抽出・分類】両作品において、家全体として「家具」の出現頻度が高く、舞台別に見ても『フルハウス』において「居間」での「テーブル」「椅子」「テレビ」「電話」をはじめ、『女学生の友』の「弦一郎の部屋」での「ベッド」「冷蔵庫」、<未菜の部屋>での「ケイタイ」「電話」など、その出現頻度は高い。また『フルハウス』においては「扉」「鍵」といった「建具・部材」が頻繁に現れている。これらは、家具が住空間の中に持ち込まれることでその場所の機能が固定され、他の空間に対して閉じた空間となることや建具が空間の境界を示すことから、部屋の独立性を表しているといえる。

【舞台空間の文字数の集計】図1より『フルハウス』では、「場所1」として「ダイニング」「居間」「応接間・ダイニング」という家族が集まる部屋が多く表れており、そこから「場所2」として家の様々な舞台を意識している。同様に図2をみると、『女学生の友』では「弦一郎」「未菜」という二人の主人公の部屋が多く描かれており、そこから家の外部を意識したり空想しているほか、家族がいる階下の様子を想像している。実際の体験ではなく「場所2」としてそれらを意識していることから、主人公とその家族の間には、両者を隔てる意識の溝が描かれていると考えられる。

【建築表現にみる住空間】抽出した建築表現要素の中で頻度が高いものに着目し、舞台の表現のされ方の関係を舞台意識相関図(図2-1、2-2-1~2)に示す。『フルハウス』では、「居間」<ダイニング><玄関>においてそれぞれ「暑苦しさ」「陰」「闇」という描写がされている。また、『女学生の友』では、<弦一郎の家>が「夜景の見えるマンション」と対比的に「暗く湿っぽい」として、「未菜の家」では家全体が「暗闇」として描写

されている。このように「暑苦しさ」や「暗くて湿っぽい」など、不快さを示すような表現がされているのは、も舞台に対するイメージが舞台相互の関係だけでなく、家族関係にも左右されるためであると考えられる。

【主体別建築表現にみる住空間】《住空間に対する価値観》を見ると『フルハウス』では、[金と家族]に対する表現を「私」は多くしているが「父」は少ない。一方[父の好み]に対して「私」「父」共に頻繁に表現している。このことにより「父」が住空間に対して理想を抱いているのに対し「私」は現実的な視点から否定しているのではないかと考えられる。『女学生の友』の、<未菜の家>において、[未菜と母][父の会社の倒産][未菜と父]が未菜にとっての《住空間に対する価値観》として表されたことから、「母」「父」の存在が未菜にとって住空間に対する大きな価値判断の基準になっているが、「母」「父」にとって「未菜」は多く表現されていない。以上より住空間に対する価値観は、家族の関係とその存在を意識することによって変化し、家族内で意識のずれが生じているといえる。

【結論】『フルハウス』では、住空間における「暑さ」に対する不快感や「闇」「陰」を、父の希望に対する否定的な感情として表現している。『女学生の友』では、住空間を「暗さ」や「音」によって表現することで、家族の崩壊を暗喩している。

住宅に対して、人は幸せな家庭生活という理想を抱くものである。しかし、柳美里が『フルハウス』『女学生の友』において描き出そうとしたものは、そういった共同幻想と現実とのずれであり、虚しさであった。そこでは、家族関係が人間の住空間に対する感情や意識に反映しており、個人という概念が重要視されている。住空間が家族という単位ではなく、個人の単位で対応していることは、現代における家族という概念の希薄さを表している。

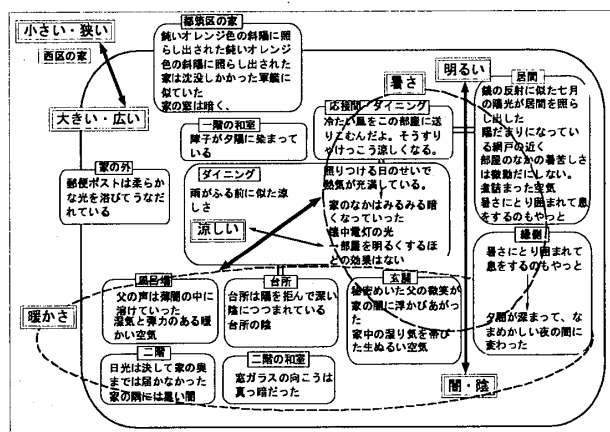


図2-1 『フルハウス』(都筑区の家)における舞台意識相関図  
(光、温度、湿度、大きさ)

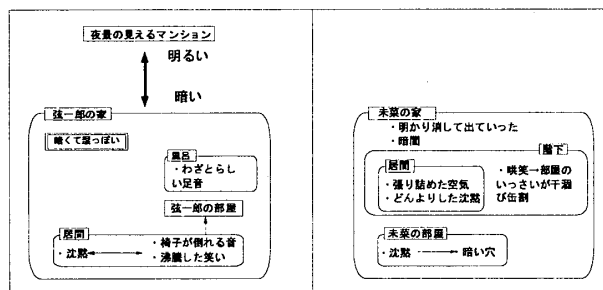


図2-2-1 女学生の友(弦一郎の家) 図2-2-2 女学生の友(未菜の家)  
における意識相関図(光、音) における意識相関図(光、音)

\* 名古屋工業大学大学院博士前期課程

\*\* 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士(工学)

\*\*\* 名古屋工業大学教授・工学博士

Graduate Student, Nagoya Institute of Technology

Graduate Student, Nagoya Institute of Technology, M.Eng.

Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr.Eng